

学位論文要約

幼児の役割遊びと自己調整機能の発達に関連

広島大学大学院 教育学研究科

教育学習科学専攻 心理学分野

D195387 藤 翔平

## 目次

### 第1章 本研究の背景と目的

第1節 ふり遊び及び役割遊びと自己調整機能の関連

第2節 先行研究の問題点と本研究の目的

第3節 本研究の構成

### 第2章 役割遊びと自己調整機能の関連についての自然観察 (研究1)

第1節 役割遊びと構成遊び, 機能遊びの中で見られる自己調整機能の比較  
(研究 1-1)

第2節 役割遊びの頻度と役割遊び内外の自己調整機能の関連 (研究 1-2)

### 第3章 役割遊びと自己調整機能の関連についての質問紙調査 (研究2)

第1節 役割遊びと構成遊び, 機能遊びの中で見られる自己調整機能の比較  
(研究 2-1)

第2節 役割遊びの頻度・質と役割遊び内外の自己調整機能の関連 (研究 2-2)

### 第4章 役割遊びと自己調整機能の関連についての縦断的調査 (研究3)

### 第5章 総合考察

第1節 本研究の成果

第2節 今後の課題

### 引用文献

## 第 1 章 本研究の背景と目的

### 第 1 節 ふり遊び及び役割遊びと自己調整機能の関連

幼児はブロックを電話に見立てる遊びや、口調や身振りを真似して母親になりきるといった遊びをすることがある。このように「あたかも別の人や物であるかのように振舞う」遊びのことをふり遊びという (Garvey, 1990)。ふり遊びは 2 歳頃から徐々に行われるようになり、3, 4 歳頃に最も盛んに行われ、児童期以降には減少する幼児期特有の遊びである (Piaget, 1951; Singer & Singer, 1992)。ふり遊びには、ブロックを電話に見立てるような物を代用する遊びから、複数人で相談しながら役割を演じる遊びまで含まれるが (Thompson & Goldstein, 2019, 2022)、本研究では、自己調整機能との関連を検討した先行研究を踏まえ、役割を演じるふり遊びである役割遊び (小川・高橋, 2012) に着目する<sup>1)</sup>。物を見立てるような遊びはトドラー期から見られる一方で、役割遊びは 5, 6 歳ごろに頻繁に行われることが明らかになっている (Thompson & Goldstein, 2019, 2022)。

役割遊びを含むふり遊びは、心の理論や創造性、言語能力など子どもの様々な側面の発達を促すと考えられ、両者の関連が検討されてきた (Lillard et al., 2013)。本研究で取りあげる自己調整機能も、その一つである。自己調整機能とは、個人にとって重要な目標を達成するために、状況に合わせて自身の思考や感情、行動を制御する能力である (Bronson, 2000)。自己調整機能に関しては様々なモデルがあるが、本研究では認知と情動の 2 側面で捉えるモデルを採用する (Whitebread et al., 2009)。

自己調整機能はふり遊びと同様の時期に急速に発達することから、両者の

---

1) 以下では、ふり遊びと役割遊びという 2 つの用語を使用するが、役割を演じることを想定している場合には「役割遊び」と表記し、役割を演じることを想定していない場合にはより広義である「ふり遊び」と表記した。

間には関連があると考えられてきた。Vygotsky (1967) は、ふり遊びの2つの特徴から自己調整機能が関連すると考えた。1つ目の特徴は、ふり遊びでは想像的な場面が作りだされる点である。もう1つの特徴は、ふり遊びではルールに従うことが求められる点である。また、ふり遊びと自己調整機能の関連はコミュニケーションの内在化の過程としても考えられている (Berk, Mann, & Ogan, 2006)。Vygotsky (1962 柴田訳 2001) は、子どもがより発達した大人と行ったコミュニケーションを内在化することによって、自己調整機能が発達することも指摘しているが、ふり遊びではより発達した大人をイメージしてコミュニケーションをすることもしばしばあるため、コミュニケーションの内在化しやすい環境であると言える。

一方、Freud (1920 須藤訳 2006) は、子どもは日常生活で感じた負の感情をふり遊びの中で解消している可能性を示唆した。さらに、Bretherton (1989) と Fein (1989) は、ふり遊びは様々な感情経験を明確化、調整、処理する機会を提供し、子どもはその経験を通して日常生活でも感情を制御できるようになると考えた。

以上の理論の検証は近年まで行われてこなかったが、2000年前後から、ふり遊びと自己調整機能の関連を検討する研究が増加してきた。先行研究では、ふり遊び、なかでも役割遊びは認知的、情動的な自己調整機能、またはその両方と関連することが明らかとなっている。先行研究の多くは相関研究であるが、最近では縦断研究や介入研究など、役割遊びと自己調整機能の因果関係を検討しようとする研究も徐々に行われている。

これらの研究は、役割遊びの中で自己調整機能がよく見られるかを検討する研究と、役割遊びの経験を通して自己調整機能が発達するかを検討する研究の2つに大別できる。前者に属する Slot, Mulder, Verhagen, & Leseman (2017) では、3歳児113名を対象に、役割遊びの質と役割遊びの中で見られ

る認知的・情動的な自己調整機能の関連を検討した。その結果、役割遊びの質は認知的な自己調整機能と中程度に関連し、情動的な自己調整機能とも弱く関連することが明らかとなった。後者に属する Elias & Berk (2002) は、縦断研究を行い、役割遊び頻度や持続時間が、将来の自己調整機能を予測するかを検討した。その結果、役割遊びは将来の片付け場面における自己調整機能を予測した。

## 第2節 先行研究の問題点と本研究の目的

しかし、以上の先行研究には、少なくとも3つの問題がある。1つ目は、他の遊びがどの程度自己調整機能と関連しているかについてふり遊びと比較した研究が少ないことである。Smith (2009) は、ふり遊びと子どもの発達に関連を考える上で3つの可能性を考える必要があると主張した。1つ目は、ふり遊びが子どもの発達にとって極めて重要である可能性であり、先行研究のほとんどはこの立場を取っている。2つ目は、ふり遊びも子どもの発達も、他の能力が発達したことによって現れた可能性であり、これに関しても多くの研究で言語能力が統制されており、十分に検討が行われていると言える。しかし、ふり遊びが子どもの発達に寄与するのと同様に、他の遊びや活動も子どもの発達に寄与するという3つ目の可能性については、ほとんど検討が行われていない。そこで、本研究では、役割遊びと他の遊びの中で見られる自己調整機能を比較する。

問題の2つ目は、ふり遊びの中で自己調整的言動を働かせている子どもが、ふり遊び以外の場面でも自己調整機能を発揮しているかを検討した研究が少なく、ふり遊びの頻度と質も含め3者の関連を検討した研究が存在しないことである。そこで、本研究では、役割遊びの頻度や質、役割遊び中の自己調整機能と、役割遊び以外の文脈の自己調整機能の関連を検討する。

問題の3つ目は、因果関係の検討である。先行研究では、ふり遊びが自己調整機能の発達を促すと考え、ふり遊びが将来の自己調整機能を予測することを明らかにする研究や、ふり遊びを用いた介入によって自己調整機能が向上することを明らかにする研究が行われている。しかし、これらの研究では、自己調整機能がふり遊びの発達を予測するという逆の因果関係や、ふり遊びと自己調整機能が相互に関係しあう双方向的な因果関係が検討されていない (Elias & Berk, 2002; Whitebread & O'Sullivan, 2012)。そこで、本研究では、役割遊びと自己調整機能について縦断的に調査を行い、役割遊びと自己調整機能の関連において双方向的な因果を検討する。

### 第3節 本研究の構成

以上の目的を達成するために、本研究では大別して3つの研究を行う。第1に、観察により、役割遊びと他の遊びの中で見られる自己調整機能の比較と、役割遊びの頻度・役割遊び中の自己調整機能・役割遊び以外の文脈における自己調整機能の関係を検討する (研究 1-1, 研究 1-2)。第2に、研究1よりも大きなサンプルサイズで検討するため、保育者評定の質問紙を開発し、役割遊びと他の遊びの中で見られる自己調整機能の比較と、役割遊びの頻度や質・役割遊び中の自己調整機能・役割遊び以外の文脈における自己調整機能の関連を検討する (研究 2-1, 研究 2-2)。第3に、縦断研究により、役割遊びと自己調整機能の双方向的な因果を検討する (研究 3)。これらの検討を通して、役割遊びと自己調整機能の関連を明らかにすることにより、役割遊びの特徴や自己調整機能の発達との関係性が明確になり、保育者は自己調整機能の観点から役割遊びの意義を理解しやすくなるとともに、役割遊びと他の遊びの違いを踏まえた保育計画を考えやすくなることが期待される。

## 第2章 役割遊びと自己調整機能の関連についての自然観察 (研究1)

### 第1節 役割遊びと構成遊び，機能遊びの中で見られる自己調整機能の比較

#### (研究 1-1)

**目的** 役割遊びと他の遊びを観察し自己調整的言動の頻度を比較する。

**方法** 参加者 年中児 16 名 (平均 58.8 か月，男女同数)，年長児 16 名 (平均 71.8 か月，男女同数) の計 32 名と担当保育者 4 名が参加した。手続き 各クラスの担任・副担任にクラス全員の役割遊びの頻度を 5 件法で評定してもらい，各頻度から人数，月齢，性別が等質になるように対象児を選出した。そして，対象児の自由保育における遊びを 15 分×3 回，合計 45 分を目安として撮影した。その際，3 回のうち 1 回は役割遊び，1 回は他の遊びが入るようにした。遊びと自己調整機能の分類 撮影した遊びを 10 秒ごとに Table 1 に示した 4 つのカテゴリーに分けた後，各遊びの中で見られた自己調整的言動を Whitebread et al. (2009) のコーディング表に基づいて分類した。分類は，その言動が (1) 認知的か (メタ認知的知識 / メタ認知的調整)，情動的か (情動的・動機づけ的調整)，(2) 遊びのどのタイミングで見られたか (プランニング / モニタリング / コントロール / 評価)，(3) 誰に向けられたものか (自己調整 / 他者調整 / 自他調整) の 3 つの観点に基づいて行った。

Table 1 遊びの分類  
(伊藤，2006 を参考に作成)

遊びの分類	定義	例	
1	a. 見立て遊び	物，行為や状況を見立てて，想像の世界を楽しむ遊び	バナナを電話に見立てる。宇宙船に乗っているふりをする。
	b. 役割遊び	役割を演じることによって，想像の世界を楽しむ遊び	お医者さんになりきる。アニメのキャラクターになりきる。
2	a. 構成遊び	材料となる物で何かを作り出すことを楽しむ遊び	折り紙をする。泥団子を作る。
	b. 受容遊び	本や動植物を鑑賞することを楽しむ遊び	虫取りをする。木の実や花を採る。
3	機能遊び	身体を動かすことを楽しむ遊び	ブランコをする。木に登る。
4	規則遊び	ルールに従うことを楽しむ遊び	リレーをする。かくれんぼや鬼ごっこをする。
5	その他	上記に該当しないもの	おしゃべりやケンカ，何もしていない



Table 2  
各遊びにおける 1 時間あたりの自己調整的言動の頻度

	役割遊び		構成遊び		機能遊び		フリードマン検定	
	M	SD	M	SD	M	SD	$\chi^2$ 値	p値
メタ認知的知識	1.22	(0.59)	6.19	(1.94)	5.36	(2.86)	4.79	$p = .091$
メタ認知的調整	121.61	(16.55)	125.70	(33.15)	109.39	(13.97)	1.94	$p = .380$
プランニング	29.07	(7.65)	2.84	(1.20)	2.54	(1.43)	22.75	$p = .000^{**}$
モニタリング	27.31	(5.96)	21.75	(4.49)	19.50	(8.98)	2.13	$p = .345$
コントロール	64.10	(12.23)	95.11	(34.24)	83.84	(11.88)	3.13	$p = .210$
評価	1.13	(0.68)	6.00	(2.01)	3.51	(1.71)	7.22	$p = .027$
情動的・ 動機づけ的調整	28.95	(14.56)	7.17	(1.55)	14.36	(6.07)	2.03	$p = .350$
プランニング	2.24	(1.26)	1.77	(0.81)	0.00	(0.00)	6.46	$p = .040$
モニタリング	1.52	(0.82)	0.67	(0.31)	3.07	(1.17)	1.09	$p = .581$
コントロール	23.72	(14.71)	3.85	(1.51)	9.65	(4.84)	3.79	$p = .156$
評価	1.47	(0.65)	0.88	(0.44)	1.64	(1.06)	0.48	$p = .607$
調整全体	150.56	(27.22)	132.86	(32.75)	123.75	(13.99)	4.03	$p = .133$
自己調整	76.19	(8.60)	101.96	(26.41)	80.88	(9.52)	1.50	$p = .427$
他者調整	71.84	(23.52)	30.13	(8.95)	41.65	(11.44)	4.10	$p = .129$
自他調整	2.53	(1.09)	0.77	(0.58)	1.22	(0.96)	1.52	$p = .468$

注) 検定の多重性による第一種の過誤の確率の上昇を防ぐために、有意水準を Bonferroni 法で修正した。N=16。

\*\* $p < .01$

**結果と考察** 役割遊び、構成遊び、機能遊びの3つの遊びが最もよく観察されたため、それらの遊びの中で見られた自己調整的言動の平均頻度を比較した (Table 2)。その結果、メタ認知的調整のプランニングにおいてのみ、有意な群間差が見られた ( $\chi^2(2) = 22.75, p < .01$ )。多重比較の結果、役割遊びの自己調整的言動の頻度が構成遊び、機能遊びよりも有意に多いことが明らかになった ( $p < .01$ )。以上の結果から、プランニングの発達にとって役割遊びが重要である可能性が示唆されるとともに、自己調整機能の多くの側面においては、他の遊びでも役割遊びと同程度に、自己調整機能が働いていることが示唆された。

## 第2節 役割遊びの頻度と役割遊び内外の自己調整機能の関連 (研究 1-2)

**目的** 役割遊びの頻度が、役割遊び中の自己調整機能、役割遊び以外の文脈における自己調整機能と関連するかを検討する。



**方法** 参加者 年中児・年長児の計 55 名 (平均 68.3 か月, 男児 26 名, 女児 29 名) と 4 名の担当保育者が参加した。手続き 直近 3 か月における役割遊びの頻度ならびに Child Behavior Rating Scale (CBRS; Bronson, Goodson, Layzer, & Love, 1990; 役割遊び以外の文脈における自己調整機能を測定) を保育者に評定してもらうとともに, 対象児に絵画語い発達検査(PVT-R: 上野・名越・小貫, 2008) を実施した。役割遊び中の自己調整機能に関しては, 研究 1-1 における役割遊び中の自己調整的言動の総和を指標とした。

**結果と考察** 偏相関分析の結果を Table 3 に示した。月齢と言語能力を統制した上でも, 役割遊びの頻度ならびに役割遊び中の自己調整機能と CBRS の間で中程度の有意な相関が見られた。しかし, 役割遊びの頻度と役割遊び中の自己調整機能の間の相関は弱く有意でなかった。以上の結果より, 日常的に役割遊びをしている子どもや, 役割遊びの中で頻繁に自己調整機能を発揮している子どもは, 他の文脈においても自己調整機能を働かせている可能性が示唆された。しかし, 役割遊びの頻度と役割遊び中の自己調整機能の相関は弱かったため, 役割遊びをすればするほど, その中で自己調整機能を発揮するとは限らず, 役割遊びに慣れることで少しの自己調整機能で十分に遊べるようになるといった可能性も考えられる。

Table 3  
役割遊びの頻度と役割遊び内外における自己調整機能の関連

	1	2	3	4	5	6	7	8
1. 役割遊びの頻度	—	.17	.65 **	.50 **	.41 **	.78 **	.14	.61 **
2. 役割遊び中の自己調整機能	.25	—	.33	.31	.34	.21	.11	.25
3. CBRS合計	.62 **	.49 *	—	.86 **	.54 **	.81 **	.60 **	.96 **
4. Classroom Self-Regulation	.43 **	.49 *	.83 **	—	.58 **	.53 **	.31 *	.83 **
5. Interpersonal Skills	.39 **	.39	.54 **	.58 **	—	.23	-.14	.48 **
6. Social Play-Interaction	.77 **	.28	.80 **	.48 **	.20	—	.50 **	.74 **
7. Engagement	.03	.19	.51 **	.18	-.23	.42 **	—	.54 **
8. Social Problem Solving	.56 **	.43	.96 **	.78 **	.47 **	.73 **	.47 **	—

注) 左下が月齢と言語能力を統制した値である。

\*\* $p < .01$ , \* $p < .05$

### 第3章 役割遊びと自己調整機能の関連についての質問紙調査 (研究2)

#### 第1節 役割遊びと構成遊び、機能遊びの中で見られる自己調整機能の比較 (研究2-1)

**目的** 研究1-1で最終的な分析まで残った対象児は16名と少なかった。そこで研究2-1では、大きなサンプルサイズで調査を行うために、保育者評定の質問紙を開発し、3種類の遊びの中で見られる自己調整機能を比較する。

**方法** 参加者 年中児69名(平均59.2か月, 男児30名, 女児39名), 年長児73名(平均72.4か月, 男児43名, 女児30名)の計142名とその担当保育者11名が参加した。手続き Whitebread et al. (2009) の分類基準を参考に、メタ認知的調整に関する25項目の質問紙を作成した(付録A参照)。そして、3種類の遊びごとに、対象児を最も観察している保育者1名に回答してもらった。また、言語能力を測定するために、保育記録による発達尺度(NDSC: 中島他, 2010)の下位項目「言語領域・理解」への回答を求めた。

**結果と考察** 月齢を統制した共分散分析を行った結果、3種類の遊び間でメタ認知的調整に有意差は見られなかった。なお、言語能力と月齢の間に交互作用が見られ、回帰の平行性という共分散分析の前提が満たされなかったため、ここでは月齢のみを統制した数値を報告している。また、段階ごとに検討をしたものの、いずれの段階においても有意差は見られなかった(Table 4)。ただし、本研究で対象とした年齢以前や、行動には現れにくい自己調整機能にお

Table 4  
3つの遊びにおけるメタ認知的調整の平均と標準偏差

	役割遊び		構成遊び		機能遊び		F値	p値
	M	SD	M	SD	M	SD		
メタ認知的調整	10.96	(3.15)	11.86	(2.64)	11.11	(2.81)	$F(2,244) = 0.14$	$p = .86$
プランニング	2.79	(0.91)	2.91	(0.75)	2.71	(0.78)	$F(2,244) = 0.72$	$p = .47$
モニタリング	2.75	(0.84)	3.07	(0.68)	2.84	(0.77)	$F(2,244) = 1.18$	$p = .31$
コントロール	2.92	(0.69)	3.07	(0.65)	2.94	(0.70)	$F(2,244) = 0.16$	$p = .85$
評価	2.51	(0.86)	2.81	(0.78)	2.61	(0.79)	$F(2,244) = 0.93$	$p = .40$

注) 統計量は、月齢を共変量として投入した反復測定共分散分析による数値である。

いては差異が見られる可能性があるため、さらに検討する必要があるだろう。

## 第2節 役割遊びの頻度・質と役割遊び内外の自己調整機能の関連 (研究 2-2)

**目的** 研究 1-2 で最終的な分析まで残った対象児は 22 名と少なかった。そこで研究 2-2 では、役割遊びの頻度や質、役割遊びの中で見られた自己調整機能、役割遊び以外の文脈での自己調整機能の関連を保育者評定の質問紙により検討する。

**方法** 参加者 研究 2-1 と同様のサンプルに調査を行った。手続き 保育者に、(1) 役割遊びの頻度、(2) 役割遊びの質 (Smilansky & Shefatya, 1990; Whitebread & O'Sullivan, 2012)、(3) 役割遊び中の自己調整機能 (研究 2-1 と共通の項目)、(4) 役割遊び以外の文脈における自己調整機能 (CBRS の中の 3 つの下位尺度 Classroom Self-Regulation, Interpersonal Skills, Social Play-Interaction を使用)、(5) 言語能力 (研究 2-1 と共通) への回答を求めた。

**結果と考察** 偏相関分析の結果を Table 5 に示した。月齢、言語能力を統制した上でも、研究 1-2 と同様に役割遊びの頻度と Classroom Self-Regulation の間には弱いものの有意な相関が見られた。研究 1-2 とは異なり、本研究では役割遊びの頻度と役割遊び中の自己調整機能の間の弱い相関が有意になった一方、役割遊び中の自己調整機能と Classroom Self-Regulation の間にはほとんど相関が見られなかった。以上の結果より、役割遊びの頻度と他の文脈における自己調整機能の間には一定の関連があると考えられる。しかし、役割遊び中の自己調整機能に関しては、研究 1-2 では役割遊びの頻度との関連が、研究 2-2 では役割遊び以外の文脈における自己調整機能との関連が見られなかった。日常的に役割遊びをしているからと言って、役割遊びの中で自己調整機能を発揮しているとは限らず、役割遊びの中で自己調整機能が見られたからと言って、他の文脈においても自己調整機能でも発揮するとは限らない

Table 5  
 役割遊びの頻度や質と役割遊び内外の自己調整機能の関連

	1	2	3	4	5	6
1.役割遊びの頻度	—	.57 **	.39 **	.36 **	.07	.61 **
2.役割遊びの質	.51 **	—	.65 **	.55 **	.41 **	.73 **
3.役割遊び中の自己調整機能	.31 **	.42 **	—	.45 **	.31 **	.54 **
4.Classroom Self-Regulation	.21 *	.06	.01	—	.77 **	.62 **
5.Interpersonal Skills	-.13	.04	-.04	.62 **	—	.45 **
6.Social Play-Interaction	.56 **	.56 **	.36 **	.35 **	.21 *	—

注) 左下は言語と月齢を統制した数値である。

\*\*  $p < .01$ , \*  $p < .05$

という複雑な関係性がある可能性が示された。

#### 第4章 役割遊びと自己調整機能の関連についての縦断的調査 (研究3)

**目的** 役割遊びと自己調整機能の因果関係を検討するために3時点の縦断研究を行う。具体的には、交差遅延モデルを使用して、自己調整機能の発達が役割遊びの頻度や質を予測するという逆の因果や、役割遊びと自己調整機能が相互に影響を与え合うという双方向的な因果関係があるかについて検討する。

**方法** 参加者 1時点目(2021年3月)では、年少児68名(平均52.8か月, 男児30名, 女児38名), 年中児72名(平均65.3か月, 男児42名, 女児30名)の計140名とその担当保育者13名が参加した。2時点目(2021年10月)と3時点目(2022年3月)も同じ集団に実施した。なお, 2時点目のデータは研究2でも使用している。手続き 3つの時点で保育者に, (1) 役割遊びの頻度, (2) 役割遊びの質, (3) CBRSの下位尺度であるClassroom Self-Regulation, (4) 言語能力(NDSC)への回答を求めた。

**結果と考察** 3時点のデータを使用して共分散構造分析を行った。役割遊びの頻度・質と自己調整機能(Classroom Self-Regulation)について, 自己調整機能が役割遊びを予測する当初の想定とは逆の因果関係や, 役割遊びと自己調整機能が相互に影響し合う双方向的な因果関係がないかを検討するために交差

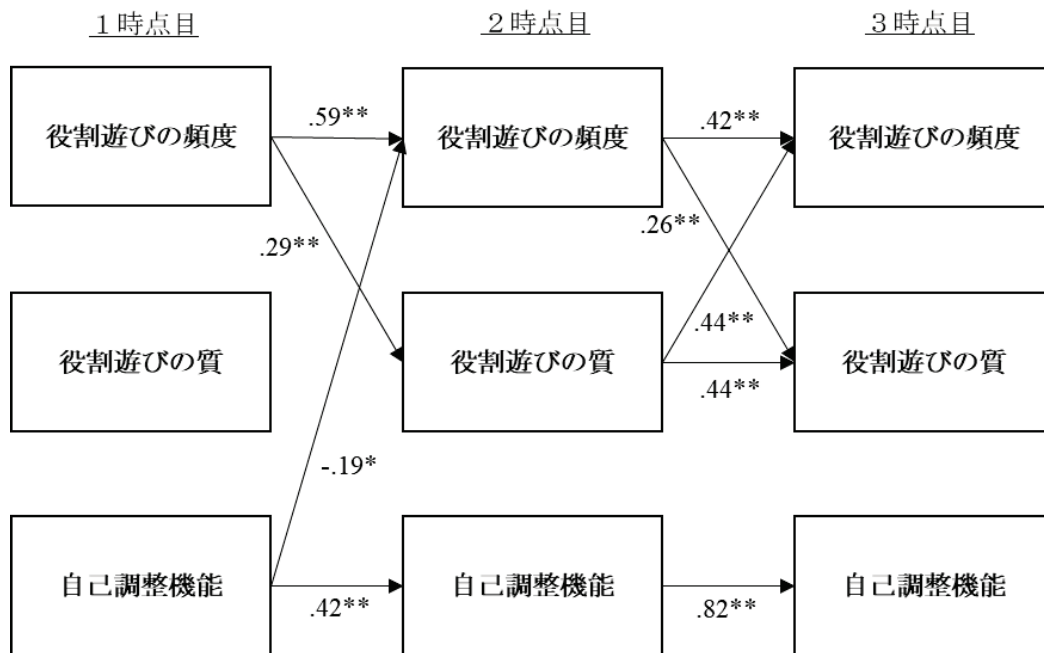


Figure 1. 役割遊びの頻度・質と自己調整機能の発達の交差遅延モデル

注) 標準回帰係数を示す。月齢と言語能力を調整変数として投入したが、図中ではパスを省略している。また、有意ではなかったパスについても省略をしている。 $\chi^2(27) = 65.30$ , CFI = .974, RMSEA = .098。

\*\* $p < .01$ , \* $p < .05$

遅延モデルを実施した (Figure 1)。その結果、1時点目の自己調整機能が2時点目の役割遊びの頻度を負に予測した一方、役割遊びの頻度や質が自己調整機能を予測する因果の方向性は見られなかった。自己調整機能が高い子どもにとって、将来的に役割遊びをすることは必要ではなくなる可能性が示唆された。ただし、本研究では年少児後期から年長児後期における役割遊びに着目したものの、より早い時期においては役割遊びが自己調整機能の発達を促すかもしれない点は考慮すべきである。

また、1時点目の頻度が2時点目の質を予測し、2時点目の質が3時点目の頻度を予測するという結果が得られたことから、役割遊びの頻度と役割遊びの質は相互に影響し合っていることも示唆された。役割遊びを頻繁にすることによって多様な要素を含んだ遊びをすることが可能になり、そのような遊びをする子どもがより頻繁に遊びをするようになるのではないだろうか。

## 第5章 総合考察

### 第1節 本研究の成果

先行研究では、役割遊びと自己調整機能の関連について以下の3点が明らかにされていなかった。1点目は、他の遊びと比較して、役割遊びの中ではより多くの自己調整機能が働いているのかという点である。2点目は、役割遊びの中で自己調整機能を働かせることと役割遊び以外の文脈において自己調整機能を働かせることの関係性が明らかではなかった点である。3点目は、役割遊びと自己調整機能の因果関係について、双方向的な因果がある可能性が検討されていなかった点である。そこで、本研究では、以上の3つの問題点を解決するために、研究1-1と研究1-2では観察を通して、研究2-1と研究2-2では保育者評定の質問紙を通して、研究3では縦断研究を通して、役割遊びと自己調整機能の関連を検討した。

まず、研究1-1と研究2-1を通して、他の遊びでも役割遊びと同様に自己調整機能が働いている可能性と役割遊びの中では他の遊びに比べて遊びを計画する言動が多く見られる可能性が示唆された。次に、研究1-2と研究2-2を通して、役割遊びの頻度が役割遊び以外の文脈における自己調整機能と関連すること、役割遊びの中で見られる自己調整機能が、役割遊びの頻度や役割遊び以外の文脈における自己調整機能と必ずしも関連するとは限らないことが示唆された。最後に、研究3では、1時点目の自己調整機能が2時点目の役割遊びの頻度を負に予測したことから、自己調整機能が高まった子どもは役割遊びをしなくなる可能性が示唆された。

一連の研究を踏まえると、役割遊びをすることによって自己調整機能が発達することはあるかもしれないが、他の遊びも同様に自己調整機能の発達を促す可能性や、自己調整機能が発達した子どもにとっては役割遊びをする必要がなくなる可能性もあるのではないだろうか。

## 第2節 今後の課題

しかし、本研究にはいくつかの課題があり、今後検討していくことが求められる。まず、年少児や年中児の前半など役割遊びで遊び始めた段階にある子どもで検討していないことが挙げられる。例えば、役割遊びをし始めた段階では、自己調整機能の発達を促すという可能性が考えられるだろう。

また、使用した尺度の信頼性と妥当性については、今後の研究において検討することが求められる。特に、研究2において使用した、遊びの中で見られる自己調整機能を評価する尺度については、保育者評定の信頼性や自然観察で得られたデータとの関連を検討することによって妥当性を検証する必要がある。

加えて、言語能力の統制についても課題が残っている。先行研究では主に幼児の語彙能力を測定する尺度が用いられてきた。一方、研究2と研究3で使用したNDSCは保育者によって言語能力を評価できるというメリットがあるが、「友達の名前がわかる」や「指示を何回か言わなくても理解できる」といったソーシャルスキルなど他の能力と関連していると考えられる項目も多くあった。先行研究と同様の語彙能力を測定した場合、本研究の結果が再現されるかについて今後検討すべきであろう。

そして、役割遊びや自己調整機能の認知的なメカニズムを明らかにするために実行機能の関連を検討する必要もあるだろう。本研究では自己調整機能との関連に着目したが、近年はふり遊びと実行機能の関連も頻繁に検討されている。どのような認知的な基盤があるために、役割遊びや自己をコントロールすることができるようになるのかは本研究では検討できていない。

最後に、実践への寄与を考えると、自己調整機能の観点から、保育者が子どもの役割遊びにどのように関与しているかを検討する必要があるだろう。介入研究が近年増加しつつあるが、Berk et al. (2006) により、大人の積極的な関与が必ずしも子どもの自己調整機能の発達につながるとは限らないことが指摘



されている。役割遊びや自己調整機能の発達に伴って、保育者の関与の影響が変容するののかについて今後検討が求められる。

#### 引用文献

- Berk, L. E., Mann, T. D., & Ogan, A. T. (2006). Make-Believe Play: Wellspring for Development of Self-Regulation. In D. G. Singer, R. M. Golinkoff, & K. Hirsh-Pasek (Eds.), *Play = learning: How play motivates and enhances children's cognitive and social-emotional growth* (pp. 74–100). New York: Oxford University Press.
- Bretherton, I. (1989). Pretense: The form and function of make-believe play. *Developmental Review, 9*, 383-401.
- Bronson M. B. (2000) *Self-Regulation in Early Childhood: Nature and Nurture*. The Guilford Press, New York, NY.
- Bronson, M. B., Goodson, B. D., Layzer, J. I., & Love, J. M. (1990). *Child behavior rating scale*. Cambridge, MA: Abt Associates.
- Elias, C. L., & Berk, L. E. (2002). Self-regulation in young children: Is there a role for sociodramatic play? *Early Child Research Quarterly, 17*, 216-238.
- Fein, G. G. (1989). Mind, meaning, and affect: Proposals for a theory of pretense. *Developmental Review, 9*, 345-363.
- Freud, S. (1920). Beyond the Pleasure Principle. *Standard editions of complete psychological works of Sigmund Freud*. Vol. 18 (pp. 7-66). London: Hogarth Press.
- (フロイト, S. 須藤 訓任 (訳) (2006). 快原理の彼岸 須藤 訓任・新宮 一成・鷺田 清一・道籬 泰三・高田 珠樹 (編) フロイト全集 17 (pp.53-125) 岩波書店)

- Garvey, C. (1990). *Play* (2nd ed.). Cambridge, MA: Harvard University Press
- 伊藤 順子 (2006). 幼児の向社会性についての認知と向社会的行動との関連:  
遊び場面の観察を通して. 発達心理学研究, 17, 241-251.
- Lillard, A. S., Lerner, M. D., Hopkins, E. J., Dore, R. A., Smith, E. D., &  
Palmquist, C. M. (2013). The. impact of pretend play on children's  
development: A review of the evidence. *Psychological bulletin*, 139, 1-34.
- 中島 俊思・松岡 弥玲・谷 伊織・大西 将史・永田 雅子・野村 香代・吉橋  
由香・神谷 美里・辻井 正次 (2010). 保育記録による発達尺度の作成と  
その項目分析および信頼性の検討. 小児の精神と神経, 50, 385-398.
- 小川 真人・高橋 登 (2012). 幼児の役割遊び・ふり遊びと「心の理論」の関  
連. 発達心理学研究, 23, 85-94.
- Piaget, J. (1951). Play, dreams, and imitation in childhood. In C. Gattegno & F. M.  
Hodgson (Trans.), *The International Library of Psychology*: Vol.25. London:  
Routledge.
- Singer, D. G., & Singer, J. L. (1992). *The house of make believe: Children's play  
and the developing imagination*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Slot, P. L., Mulder, H., Verhagen, J., & Leseman, P. P. (2017). Preschoolers'  
cognitive and emotional self - regulation in pretend play: Relations with  
executive functions and quality of play. *Infant and Child Development*, 26,  
e2038.
- Smilansky, S., & Shefatya, L. (1990). *Facilitating play: A medium for promoting  
cognitive, socio-emotional and academic development in young children*.  
Psychosocial & Educational.
- Smith, P. K. (2009). *Children and play: Understanding children's worlds*. West  
Sussex, England: Wiley-Blackwell.

- Thompson, B. N., & Goldstein, T. R. (2019). Disentangling pretend play measurement: Defining the essential elements and developmental progression of pretense. *Developmental Review, 52*, 24-41.
- Thompson, B. N., & Goldstein, T. R. (2022). Observing the Developmental Progression of Pretend Play across the Preschool Years. *Journal of Cognition and Development, 23*, 482-502.
- 上野 一彦・名越 斉子・小貫 悟 (2008). PVT-R 絵画発達語い検査 日本文化科学社.
- Vygotsky, L. S. (1962). *Thought and language*. Cambridge, MA: MIT press.  
(ヴィゴツキー, L. S. 柴田 義松 (監訳) (2001). 新訳版・思考と言語 新読書社)
- Vygotsky, L. S. (1967). Play and its role in the mental development of the child. *Soviet Psychology, 5*, 6-18.
- Whitebread, D., Coltman, P., Pasternak, D. P., Sangster, C., Grau, V., Bingham, S., Almeqdad, Q., & Demetriou, D. (2009). The development of two observational tools for assessing metacognition and self-regulated learning in young children. *Metacognition and learning, 4*, 63-85.
- Whitebread, D., & O'Sullivan, L. (2012). Preschool children's social pretend play: Supporting the development of meta-communication, metacognition and self-regulation. *International Journal of Play, 1*, 197-213.

付録 A. メタ認知的調整尺度

●プランニング（5項目）

- ①遊びの中で必要になることや予想されることを，明確にしたり決めたりする
- ②一人一人の役割を決め，それぞれが何をすべきかを相談する
- ③遊びの目的と具体的な目標を決める／④遊びをどのように進めるかを決める
- ⑤遊びをするのに必要な人や物，情報を，探したり集めたりする

●モニタリング（7項目）

- ①遊びの途中で，自分の遊びを言葉で表現する／②遊びでの頑張りやできばえを評価する
- ③遊びの途中で，これまでの遊びの状況や現在の遊びの状況を確認する
- ④遊びの途中で，遊びのやり方について，思い出したことを言ったり，思い出した内容を評価したりする／⑤遊びがうまくいかない場合は，自分で修正する
- ⑥遊びの途中で，遊びがうまくいかない原因を見つけるなど，遊びでの行動やできばえを確認する／⑦遊びの途中で，友だちの遊びのできばえを確認し，必要があれば修正する

●コントロール（8項目）

- ①これまでの遊びを振り返り遊び方を変える／②自分の遊びを進めていく中で身振りを使う
- ③遊びをより良いものにするために，遊び方を提案したり実際に行ったりする
- ④これまでに身に付けた遊び方を，新しい状況に用いる
- ⑤遊びを繰り返し，同じような結果になるかを確認する / ⑥他者に助けを求める
- ⑦お手本となる物や人を，コピーしたり，まねたりする
- ⑧身振りを使い，他の子どもを助けたり導いたりする

●評価（5項目）

- ①遊びの後に，自分の遊びを振り返ったり，どんな遊びであったかを説明したりする
- ②遊びの後，やってみた遊び方を評価する / ③遊びが終わった後，できばえを評価する
- ④遊びが終わった後，遊びがどこまで進んだかを確認し，言葉で表現する
- ⑤初めに立てた遊びの目標を達成したとき，その結果や計画が役に立ったかを調べる。

付録 B. 役割遊びにおける自己調整機能の例

---

A 児 (対象児) と B 児がままごとコーナーで遊んでいるところに、そこに、C 児がやってきた。A に対して C が「ステーキ買って来たよ」と言うと、A は「おう、ありがとう」と言った。

C が「ぼく、お父さん」と言ったのに対し、A は「ううん (違うよ)。ぼくがお兄ちゃん、B くんがお父さん。C くんがママ。」と言った (メタ認知的調整・プランニング・自他調整)。しかし、C は「違うよ」と言った。

すると、A が「じゃあ、2 人 (B くと C くん) ともがお父さんね」と言った (メタ認知的調整・プランニング・他者調整)。C は「じゃあ、A くんがお母さん？」と確認したが、A は「違う」と言った (メタ認知的調整・プランニング・自己調整)。

洗濯物干しの上にもものが置いてあるのに気づき、A は「なんですか、これは？」と B に聞く (メタ認知的調整・モニタリング・他者調整)。B は銃で撃つ真似をするが、A は特に反応しない。

C が「チョキ、チョキ」と言いながら布でできた食材のおもちゃを扱う様子を見て、A は「はい、どうぞ」と言って木皿を C の目の前に置いた (メタ認知的調整・コントロール・他者調整)。C はその木皿に食材を入れていく。

A はスプーンを 2, 3 本手に持つと、机の上に置いた (メタ認知的調整・コントロール・自己調整)。しかし、スプーンを再度手に取り、棚の上に置き換えた。

A が食器棚の最下段の扉を開くと、食材が入ったかごを見つけた。

A は「(かごが) あったぞ」と言い、「ねえ、C くん、ピザ届いたぞう」と言った (メタ認知的調整・モニタリング・自己調整)。

かごの中にあつたスプーンを手にした A は「スプーン、どこにあつたの？」と C に聞く (メタ認知的調整・モニタリング・他者調整)。

---